

世界トップからの後退、日本の金型産業の今後をとともに考えたい。



ビジネス学部准教授
浅井 敬一郎

【学歴・職歴】
1990年3月 名古屋大学経済学部経営学科卒業
1992年3月 名古屋大学大学院経済学研究科経営学専攻博士前期課程修了
1995年3月 名古屋大学大学院経済学研究科経営学専攻博士後期課程単位取得満期退学

【職歴】
1995年4月 名古屋大学経済学部助手
1997年4月 豊橋創造大学短期大学部専任講師
2000年10月 愛知淑徳大学コミュニケーション学部助教授
2004年4月 愛知淑徳大学ビジネス学部助教授

浅井先生の専門は経営学。大学院生の時に金型産業に興味を持ち、以来15年間、このテーマに取り組んでいます。

「金型」は自動車のボディを始め、さまざまな部品を加工する際のものになる金属製の「型」のこと。日本では高い技術を持つ金型メーカーが世界をリードしてきましたが、最近その地位は低下してきたそうです。「日本の金型産業が今後どう展開していくのか、目が離せませんね」。浅井先生は(財)金型技術振興財団の「金型産業史編纂」事業の主査も務め、「中小企業の技術史を記録しておくことは大切です」と各地の金型メーカーへ自ら取材に赴いています。

一昨年10月から1年間、愛知淑徳大学国内研修制度で広島大学を訪れ、「中国プラスチック金型メーカーにおける技術革新の導入とスキル」(右写真参照)を執筆。この論文で本年9月、日本経営学会賞を受賞されました。



【浅井先生の主要論文リスト】 ○分担執筆 □論文
○「現代経営学—経営学研究の新潮流」(桜井克彦編著) 税務経理協会 2006
□「中国プラスチック金型メーカーにおける技術革新の導入とスキル」日本経営学会「日本経営学会誌」第20号 2007
□「做い型彫り機導入における金型製作とスキルの変容」日本経営学会「日本経営学会誌」第21号 2008
□「金型産業における技術革新とスキルの変容—3次元ソリッドデータの活用」日本中小企業学会「日本中小企業学会論集」第27号 2008

私

は、「金型産業」を対象に「技術革新に伴う技能の変容」というテーマを研究しています。金型は、製品設計図面を形として具現化するためのツールであり、量産型の製造業には欠くことのできないものです。

大学院生であった1992年に自動車の2次部品メーカーの実態調査をする機会を得ました。そして不況下での好業績企業の競争優位の源泉の一つとして、「金型製作能力」があるのではないかという仮説を持ち、1993年より金型メーカーへの調査を始めました。

先

行研究を調べるうち、アメリカでは日本車の競争力の一つに金型製作技術があるという、大がかりな日本での調査レポートを1987年にミシガン大学が、1990年にハーバード大学が出していました。精緻な調査ではありま

したが、技能に関しては余り分析をしておらず、徐々に自分の研究方向が定まってきました。1995年より調査対象を東南アジアに広げ、技術移転の阻害要因を技能形成の視点から分析するようになりました。

1 990年代後半の日本の金型産業は、出荷額ベースで世界シェアの2割を占めており、技能集約産業のため、海外から追いつかれることは無いであろうと考えられていました。しかし21世紀に入り、これまで熟練技能者に頼っていた形状の仕上がり、日本の工作機械メーカーの技術開発により加工プログラムと機械のみで難形状加工、ミクロレベルの加工ができるようになりました。

加えて資金調達力、販売力の弱さが露呈し、日本の金型産業の相対的な競争力が低下していきましました。同時期に中国での調査を開始しましたが、当初は機械だけで成形できるレベルの製品で投資を回収するという考えの企業が多く見受けられました。その後、完全な機械はなく、その足りない部分を日本人のベテラン技術者、技能者を雇用し、補完するという考えの華人系経営者が出てきました。今後、日本の脅威になるでしょう。

日本に何を残すべきか、大学生の若い世代の人たちにモノづくりの大切さを伝え、一緒に考えていくことができればと思っています。